

## 華嚴教学における「理」の概念

織田 顕祐

中国の華嚴教学は、唐代の賢首大師法蔵によつて大成されたと見ることが出来る。そして、その中心思想は法界縁起である。法界縁起とはすべての物事を「事」と「理」との関係によつて解きほぐそうとするものであるが、その場合の「理」という概念はどのような内容であるのか。仮に中国の古典的な内容との相違が有るとすれば、それはどのような背景によるのであろうか。これらの諸点を明らかにするのが本研究の目的である。

そこで、法蔵の理事説の典型的な用例をはじめに見てみよう。

無分斉の理は既に性を改めずして而も全く是れ事なり。

是の故に一事に理を撰して皆尽くさざること無く、余

の事も理の如く一事中に在り。理に際限なく分かつべからざるを以ての故に、一事の処に随いて皆全撰せらるるなり。是の故に一の中に常に一切有り。

〔華嚴經探玄記〕卷第一、第五能詮教体の  
中の第七事融相撰門、大正三五、一一九b)

法蔵の思想は、前半期の太原寺における研究時代と、翻訳三蔵の訳場で經典翻訳を通しながら、従来錯綜していた問題を解明していく後半期とに大きく二分できる。『探玄記』は前半時代に既に書かれていたが、後半期とも重なつており、法蔵の名著といふべきものである。ここには法蔵が到達した縁起觀の主要な点が簡潔に表現されている。「無分斉の理」とか「一事に理を撰す」という考え方がその中心的なものである。これはきわめて中国的な縁起の表現であると言えるが、一体どのようなことを表しているのだろうか。そこで、これらに対する従来の伝統的な華嚴教学研究における解説を見てみたい。

理法界とは万有の理体、実体と呼ぶ名称なり。夫れ現象界は前に云う如く差別無窮なるものなり。之に反して実体、本体は無差別平等絶対無限不生不滅不増不減の意味を有するものなり。即ち彼の差別の現象は主觀客觀共に虚妄なるが故に非真非実なりと云うべく、既

に非真非実なるが故に無体なりと云うべし。

(湯次了榮著『華嚴大系』四二八し)

本書は、従来の伝統的な華嚴教学研究では大変權威ある著作として重要視されてきたものである。しかしながら、教理用語の羅列に終始しここから具体的なことを理解することはほとんど不可能である。

従つて本稿では、方法を変えて基本的なことから尋ねていくことにする。そこでまず「理」という文字の中国における伝統的な概念についていくつかの辞書を尋ねてみたい。「理」という文字の辞書的な意味について、現行の主な漢字辞典に依れば、

①本義は玉をおさめ磨くこと。転じて広くおさめ正す義とし、又玉の筋目の義より転じてミチ、スジ、コトワケ等の義となる。(『大字典』)

②物事のすじ目。語源的には玉をよく磨いてそのすじ模様を美しく表すことをいう。道理、義理、条理を意味し、治める、正す、通す、法でさばく、分かつなどの意味に用いる。(『中国思想辞典』四一六頁)

などと記されている。これに依れば「理」は、道理性もしくは法則性ということを意味しており、華嚴教学が言うような言語化以前の全体性のようなことではない。ではこの

ような華嚴教学の「理」の概念は一体どこからやってきたのだろうか。

法藏は、華嚴教学の出発点を智儼の『搜玄記』に見ている。そして智儼の『搜玄記』撰述は、次ぎのような伝説をもっている。

後、異僧の来るに遇う。謂いて曰く、汝一乘義を解ることを得んと欲すれば、其れ十地中の六相の義慎んで軽んずることなかれ。

(『華嚴経伝記』巻第三、大正五一、一六三c)  
つまり、智儼の華嚴教学は『十地経論』の六相義を深く研究することで完成したと言うのである。現に法藏は最初期の自著である『五教章』を「六相偈」で締めくくっており、この問題に関する並々ならぬ傾倒ぶりがうかがえるのである。

では『十地経論』の「六相」とは一体どのような思想なのだろうか。つぎに、『十地経論』に説かれる六相説を検討しよう。

一切所説の十句中に皆六種の差別相門有り。此の言説解釈は当に知るべし事を除く。事とは謂わく陰界入等なり。六種相とは、謂わく総相、別相、同相、異相、成相、壞相なり。

〔『十地経論』卷第一、大正二六、一二四c—五a〕  
 これは、『十地経』で金剛藏菩薩が禪定に入った後、仏の加護を受けて、いよいよ十地の教説をこれから説こうとする場面を注釈したものである。従ってここで「事を除く。事とは謂わく陰界入等なり。」というのは、禪定中の事柄を言語表現することに関する問題点を表している。『十地経論』では、仏のさとりのである「自体本来空」を言語化すること自体がもと問題であったから、金剛藏菩薩が教説を説くに当たってこのような点が指摘されたのである。しかし智儼の『搜玄記』を見てみると「六相義」はこのような問題としては理解されていない。

問う、何を以てただ総別の六義は理に順ずること増な  
 ることを得て事を取らざると知ることを得るや。答う、  
 論主は事は六相を具せざること簡ぶ。唯義に約して  
 弁ず、知るべし。(十地品第六地、大正三五、六六b)  
 ここで智儼は、縁起法についてどうして『十地経論』は  
 「理」に順じて説くのか、縁起法とは本来具体的な「事」  
 に関して説くべきものではないのかと自問して、それは世  
 親が、具体的な一つ一つの諸法を問題とするのではなく、  
 本来的な意味から弁じているからであると自答しているの  
 である。つまり、『十地経論』の「事を除く」を「理」に

ついでのものであると理解しているのである。智儼がこの  
 ような理解をするためには『十地経論』を読むに当たって、  
 あらかじめ「理事」の視点がなければならぬことは明らか  
 である。このように考えてくると杜順の『法界観門』  
 が「理事」の視点から縁起法を様々に解釈していることが  
 非常に重要なことと考えられるのである。従来から、華嚴  
 宗の祖統説に関しては、様々な意見があるが、こうした視  
 点から智儼と杜順の関係を問題にした意見はかつて聞いた  
 ことがない。

以上によって、法蔵が華嚴教学の中心問題とした法界縁  
 起の思想的な背景について概観した。本稿ではその内容に  
 までは関説できなかつたが、次ぎのような点が明らかにな  
 った。第一に、法蔵を頂点とする華嚴教学の「理(法界)」  
 とは、『十地経論』に説かれる本来、「空」を言語化する場  
 合に欠くことのできない視点であった「六相」を、現在す  
 る事物の縁起しているすがたであると解し、その縁起して  
 いるすがたを「理」と解することによって成り立ったので  
 ある。これは「空」という理法の有的展開であると言える。  
 その一方で、言語表現に関する問題を存在論に導入するこ  
 とは、現実的な問題を言語内的なものに閉じこめていく危  
 険をはらんでいるとも言えよう。これは言葉を換えれば仏

教の形而上学化と言えるが、この問題は法蔵の終生の課題であった可能性がある。第二に、従来の華嚴教学研究では、あまり明確でなかった智儼と杜順の密接な関係が明らかに、長年問題であった華嚴教学の祖統説に一定の方向付けができるように思う。智儼と杜順の間には想像以上に強いつながりがあったと考えなければ、「六相義」の中国的理解の問題は解けないと思われる。

## 日本の教育哲学——木村素衛の場合

大西 正倫

本発表は、日本の教育哲学者・木村素衛（もとむら）（一八九五—一九四六、明治二八年—昭和二一年）の教育思想を取り上げ、西洋型の近代教育・教育学の前提的枠組みとの対比においてその特質を示し、その可能性を透視するものである。

木村は美の本質と構造に深い関心をもっていたが、彼にあつてその関心は、実践的存在としての人間の生と世界の構造についての存在論的な探求心によつて支えられていた。〈表現〉が彼にとつて根本的なテーマであつたが、それは広義の〈実践〉と別のことではなかつた。さらに〈教育〉も、この〈表現〉の一つとして位置づけられていた。では、〈表現〉ということをも木村はどのようなことと見たのか。

### 一 表現の構造

木村にとつて、彫刻作品の制作という営みが〈表現〉の